

突っ走る。しかも青少年期を知識のつめ込みに終始させることは、知識そのものに対する姿勢を歪める。それは常に与えられた知識であって、発見したり創り出した知識

ではないからだ。日本の現状は、他力依存と模倣主義への反省を必要としているのではないのか。

## 最近の「研究日誌」から

山 本 隆 基

ここ数年来、ピューリタン革命期のレヴェラーズ（平等派）の思想分析をおこなってきた。The British Museum からマイクロフィルムで取り寄せた一次史料を中心的素材として、レヴェラーズ政治思想の宗教性を追究し、一定の収穫をおさめることができた。その一端は『史学雑誌』恒例の「回顧と展望」でもとり扱われた。（82巻5号320頁。83巻5号279頁。）現在は、レヴェラーズ研究から導出されたテーマとして、革命前ピューリタンとトーマス・ホツプズの思想研究にとり組んでいる。さらに広く、17世紀イギリス政治思想像の構築も、アクチュアルな様相をもって、私の問題視圏に入ってくるようになった。こうして私の研究生活はひとまず軌道にのり、将来的展望も切り開かれんとしているかに見える。

しかし、まさにこの時点で、私の研究もっている限界の所在とその克服が、ぬきさしならぬ問題として念頭をはなれぬようになってきた。私の研究は、もっぱら、史料の実証と解釈にかたむき、単なる史実の現地報告に終っていたのではないか。実証と解釈を基礎、領導する基本的視角を不問に付し、それを自覚的に練りあげていく作業を怠ってきたのではないか。たしかに客観的にみれば、おそらく無前提的な実証と解釈は存在しえぬから、事の真相は、無

自覚無反省のままに旧来の問題設定にのっかかり、政治思想の近代化というテーゼを踏襲していたということであろう。私も早くから、一般的・外面的にはかかる欠陥に気づいていた。しかし、それが私の研究生生活と具体的・内面的かかわりを持ちはじめた（私はこの点を大切にしたい）のは、やはり、研究の現段階においてである。つまり、前述のように問題関心が拡大深化して、将来の研究をどういう方向や内容で進め、どのような17世紀イギリス政治思想像を構築すべきかという課題が私の思索射程にくみこまれるようになった時点においてである。その次第を具体的に述べればこうである。問題関心の拡大深化に随伴して、福田欽一『近代政治原理成立史序説』、浜林正夫『イギリス革命の思想構造』、越智武臣『近代イギリスの起源』、大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』など、先学によって開示された巨大な世界とのもろなかたちの交渉がはじまった。ところが、これら先学者はいずれも史実の探索のなかから独自の近代観を練りあげ、同時にそれを武器にして史実に切り込んでいる。豊富な史料による周到な実証—それだけでなく、その作業のすみずみまで、独創的な近代観が貫流している。そして、上記の著作はまさにこのような独創的近代観の故に異彩を放つ

ているように見える。このような業績をふまえて、私の今後の研究方向を考えると、旧来の常識的近代観や概念装置に安易にもたれかかり、単なる実証と解釈という技術的操作に安住することは許されない。さもなくば、せいぜい、旧来の史料の部分的新解釈や新史料の発掘による従来の研究成果の修正、補足の域にとどまり、その根底的克服（たとえ無謀な試みであれ、かかる志向性そのものを放棄することは許されない）は期すべくもない。こうして私は、先学の近代観を内在的・批判的にのりこえつつ、独自の近代観を構築し、研究途上の基本的視角を確立するという、途方もなく大

きな課題に逢着することになった。

このような課題が胎生してから一年余になるが、課題の大きさに気おかれて、それに肉迫していく気力にもぶりがちであり、あえて挑戦を試みても思索行程は空しく堂々めぐりをくりかえす。しかし、このような行きづまりに屈することなく、逆にそれを新たな飛躍の酵母と化すべく、忍耐つよく考えつづけていきたい。うれしいかな!! 実をいえば、昨夜の就寝直前の思索のなかで、暗夜のはるかかあなたに一条の薄光めいたものを探りあてたのである。

(7月20日)

## 「国民のための大学づくり」にみる一般教育研究

——日教組大学部教育研究集会より——

須永哲雄

日教組大学部教研集会の記録として「国民のための大学」が発行され始めてから、すでに4年が経過した。

日教組教研集会のなかに「大学教育はいかにあるべきか」の特別分科会が設けられたのは1961年の第10次教研が最初であり、それ以来毎年開かれている。大学部が大学教育について更に徹底した研究の必要から独自の夏の教研を持ったのは1970年であった。

私はこれまでに日教組教研および大学部教研に数度出席する機会を得たので、これらの10数年にわたる教研活動の成果の一部をここ紹介してみようと考えた。なお紹介にあたって中心を一般教育におき、既に出版された資料、大学の教育（「日本の教育」

第10集～第16集より）と「国民のための大学」第1集～第3集を参考とした。

### ▲国民のための大学

日教組教研大学分科会および大学部教研が一貫して追求してきたものは「国民のための大学づくり」であったといえる。

戦前の国家中心的な大学の理念を捨て去り、戦後に新しく出発した「新制大学」は国民のための大学であり、そこでは一般教育と専門教育を中心とし自由と自治と自主性に富んだ民主主義的な教育、研究の場が作り上げられるはずであった。1961年の大学分科会は、戦後15年を経て新制大学発足当初の理念からは遠く、かえって大学が権力への従属を強いられようとしている事態への危機感から、改めて「国民のための